

# ガソリン小売価格の循環的変動の存在が価格転嫁に与える影響

河又 裕士<sup>†</sup>, 秋山 英三<sup>‡</sup>

<sup>†</sup>筑波大学大学院 システム情報工学研究科, <sup>‡</sup>筑波大学 システム情報系

## 1. はじめに

ガソリン卸価格の変動に対してその小売価格がどのように反応するかは経済政策を議論する上で重要な問題である。

Lewis & Noel (2011, *Rev. Econ. Stat.*)は、小売価格に対する卸価格の転嫁速度に焦点を当てている。彼らは米国市場において、エッジワース・サイクル (EC) が発生している市場では、卸価格から小売価格への転嫁速度が顕著に速くなるということを示している。ここで EC とは「急激な高騰」と「緩やかな下落」が交互に繰り返される循環的な小売価格変動のパターンのことである (図 1a に実例)。

しかし、EC 発生地域における転嫁速度が速くなるとう上述の結論が米国市場以外でも一般に成立するかどうかはまだ分かっていない。また彼らは、卸価格の変動分が完全に (100%) 転嫁されるまでの時間に主な焦点を当てている。しかし、現実のガソリン小売店が、卸価格の変動分を小売価格へそのまま上乗せするとは必ずしも限らない。

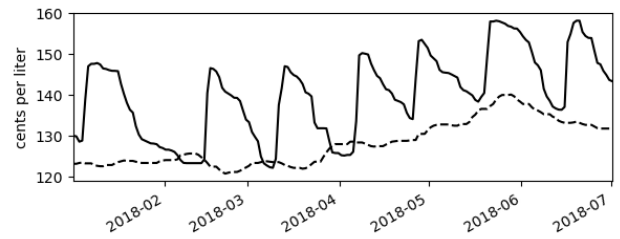
以上を踏まえ本研究では、卸価格変動に対する小売価格の反応を測る指標として次の二つを考える。一つ目は、卸価格の変動が起こってから新しい均衡水準へ移行するまでの期間であり、二つ目は、卸価格の変動分の最終的な転嫁率である。これらの指標を用いて本研究では、日本・豪州の市場において、EC の発生が価格転嫁へどのような影響を与えるかを検証する。

## 2. 手法

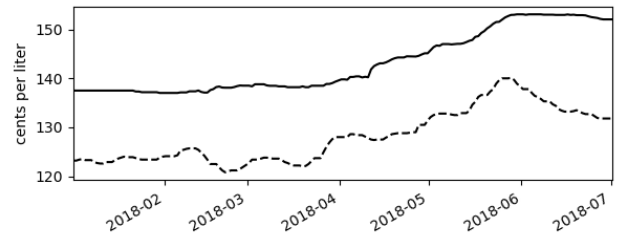
本研究では、日本・豪州の各市場における卸価格変動に対する小売価格の反応を検証する。このためにまず、日本市場では市区町村ごと、豪州市場では統計区分地域ごとに、日次平均小売価格における EC 発生の度合いを測定する。そして、EC 発生度合いの高い地域群と低い地域群のそれぞれに対する回帰分析とシミュレーション分析を行うことで、各群における上記の二つの指標を推定する。なお本手法は、Lewis & Noel (2011) で提案された手法を基にしている。

## 3. 結果と議論

まず、卸価格の変動が起こってから新しい均衡水準



a. Penrith 地域 (EC 発生度合いの高い地域)



b. Port Macquarie 地域 (EC 発生度合いの低い地域)

図 1. 豪州におけるガソリン小売価格 (実線) と卸価格 (点線) の推移の例

へ移行するまでの期間の検証結果について述べる。豪州市場においては、EC 発生度合いの低い群よりも高い群のほうが移行期間は大幅に短いことが分かった。これは、Lewis & Noel (2011) の結果と整合的である。一方で日本市場においては少し異なる結果が得られた。具体的には、卸価格の下落時には、EC 発生度合いの高い群のほうが移行期間は大幅に短い、高騰時には、EC 発生度合いの低い群のほうが移行期間は少し短かった。つまり、卸価格の下落時については Lewis & Noel (2011) と整合的な結果が得られたが、高騰時については整合的な結果が得られなかった。

次に、卸価格の変動分の最終的な転嫁率についての検証結果について述べる。この検証においては、日本・豪州共に、EC 発生度合いの低い群よりも高い群のほうが最終的な転嫁率が高くなるという結果が得られた。また、EC 発生度合いの高い群の最終転嫁率は 1 を超えていた。これは、EC が発生している地域において卸価格が変動すると、その変動分以上に小売価格が反応するというを示唆する。なおこの現象は、本研究によって初めて明らかにされた。